

使徒言行録 第17章1～15節

今日は、召天者記念礼拝です。この神戸西教会に関わってこられた信仰の先輩方を覚えて、共に礼拝を行いたいと思います。

今日の聖書の箇所、使徒言行録の17章は、パウロの第2回伝道旅行の最中に起こった出来事です。パウロはかつて、イエス・キリストに従う者たちを迫害していました。パウロは、神に対する熱心さのゆえにイエス・キリストを偽物であると考え、イエスに従う者たちを牢獄へと送っていったのです。ところがパウロは、ダマスコへの途上、幻の中でイエス・キリストと出会い、自分の過ちを認めます。回心したパウロは、偉大な伝道者として、主に東ヨーロッパの地中海沿岸付近を3度伝道旅行に出かけますが、その2度目の伝道旅行は使徒言行録の15章36節の箇所から始まっています。

第2回伝道旅行に際して、パウロはそれまでバルナバと一緒に伝道の働きを担ってきましたが、意見の食い違いから別々に伝道旅行に出かけることになります。バルナバは第1回伝道旅行でずっと一緒に行動してきた信仰の友でした。そのバルナバと別々に出かけることになったパウロは、新しい同行者としてシラスとテモテという同労者を迎えます。すばらしい働きをなした偉大な伝道者パウロも、伝道旅行に出かける際には共に働く同労者を必要としたのです。こうして第2回伝道旅行に出かけたパウロ一行は、ミシア地方のトロアスという町に着きます。トロアスは現在のトルコのあたりになりますが、パウロはそこで幻を見ます。使徒言行録16章6節からの箇所に記されていますが、海の向こう側、マケドニアの国の人が私たちを助けてくださいと懇願する幻でした。マケドニアは今のギリシアにあたります。そこでパウロたち一行は海を渡って、マケドニア州のフィリピという町に出かけます。そこでパウロたちは、先週の礼拝で学びましたように、捕まって牢屋に入れられます。ところが、突然大地震が起こり、牢屋の扉がみんな開いてしまいます。牢屋の番をしていた看守は、囚人たちが全員逃げたと思い込み自分の命を絶とうとしますが、牢屋から逃げ出さなかったパウロたちにうながされて一命を取り留め、イエス・キリストを信じる信仰に至ります。そんな出来事があった後、パウロ一行は、テサロニケの町にやってきました。そこから今日の聖書の箇所です。新約聖書の手紙にも記されているテサロニケの教会の基礎となったのが、このパウロの伝道旅行によって起こった信仰者たちの群れでした。

パウロは、テサロニケで伝道活動を行いましたが、その方法はいたってシンプルでした。17章2節と3節を読みますと、こう記されています。【パウロはいつものように、ユダヤ人の集まっているところへ入って行き、3回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い、「メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」と、また「このメシアはわたしが伝えているイエスである」と説明し、論証した。】パウロが行った伝道は極めてシンプルでした。パウロは聖書を引用して論じました。その中身は、メシアの苦難と十字架、そして復活でした。パウロは、苦難と十字架、復活のメシア・救い主がイエス・キリストであることを説明し、論証しただけでした。つまりパウロは、イエス様が苦しみを受け、十字架に架けられ、よみがえったこと。そして、聖書にはメシア・救い主が苦しみを受け、十字架に架けられ、よみがえることが記されている。だから、イエスはキリスト、救い主であると、この三段論法的な説明を、聖書を用いて語ったのです。

ここで今日の聖書の箇所から離れて、命ということについて、少し考えてみたいと思います。キリスト教ではよく「永遠の命」という言葉が用いられますが、永遠の命とはいったい何を意味するのか、みなさんはどう思われますでしょうか。昔、人生50年と言われた時代もありましたが、今や、人間の寿命は100年に迫る勢いです。このように人間の寿命が50年から100年と延びていって、医学が発達し、やがて人生200年、300年という時代が来るかもしれない。そのように、寿命がどんどん延びていった先に、永遠に無くならない命、永遠の命がある。「永遠の命」を、そんなふうに考えておられませんでしょうか。聖書で語る永遠の命とは、そんなふうに命の長さが延びていった先に永遠に無くならない命を指しているのではありません。そのように、命が量的に無くならないようになることではなく、命の質が変わる。それを聖書では永遠の命と呼ぶのです。ヨハネによる福音書17章3節に、こんな言葉が記されています。新約聖書202ページになります。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」。これは、イエス様が最後の晩餐の席上で、天の神様に向かって祈られた祈りの中に出てくる言葉です。ここでイエス様は、永遠の命とは、天の神様と、その神様が遣わしてくださったイエス様を知ることだと教えてください。ここで使われている「知る」ということは、頭の中でただ単に知識として知ることではなく、天の神様やイエス様と親しい交わりを持つことを意味します。聖書が語る天の神様とは、天と地のすべてを造られた神様のことです。天地創造の神、それは私たち一人一人をこの世に生まれさせてくださった私たちの命の創り主でもあります。私たちの命を造ってくださったお方。そしてイエス様は、私たちの罪の贖いとなって十字架にかかってくださいました。つまり、天の神様とイエス様を知るということは、私たちの命の創り主である神様と私たちの罪の贖い主であるイエス様を知るということです。自分の命が誰によって造られたのか、自分の罪が誰によって贖われ赦されたのか。それを知らないで生きていた私たちが、神様とイエス様を知ることによって、自分の命の創り主と自分の罪の贖い主を知る者として生きる。神を知らなかったころは、自分の命の創り主と自分の罪の贖い主を知らずに生きていた命が、自分の創り主であり贖い主であるお方を知っている命として生きることができる。命の質が変わる。それを聖書では、永遠の命と呼んでいるのです。

さて、今日の聖書の箇所に戻りますと、4節には、おもしろいことが記されています。「ある者は信じて、パウロとシラスに従った」。そしてそれは、ユダヤ人だけではありませんでした。4節の後半には、「神をあがめる多くのギリシア人や、かなりの数のおもだった婦人たちも同じように二人に従った」と記されています。ユダヤ人だけではなく、多くのギリシア人、そして婦人たちが信じて従っていったのです。ところが、テサロニケの町の人々が全部、パウロたちを信じたわけではありませんでした。5節を読みますと、「ユダヤ人たちはそれをねたみ、広場にたむろしているならず者を何人か抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させ、ヤソンの家を襲い、2人を民衆の前に引き出そうとして搜した」のです。そして暴動を起こした彼らは、パウロとシラスが見つからなかったので、ヤソンたちを町の当局者たちのところへ引き立てて行って、大声でこう言いました。「世界中を騒がせてきた連中が、ここにも来ています。ヤソンは彼らをかくまっているのです。彼らは皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っています」。そしてこの言葉を聞いた町の当局者たちは動揺し、ヤソンたちからお金を巻き上げたのです。

さて、そんなこんなでテサロニケにすることができなくなったパウロとシラスは、ベレアの町に行きます。パウロとシラスは、ここでもユダヤ人の会堂に入り、同じようにイエス・キリストを宣べ伝えました。11節からの箇所にはこう記されています。「このユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。そこで、そのうちの多くの人が信じ、ギリシア人の上流婦人や男たちも少なからず信仰に入った」。ベレアのユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人とは違いました。彼らは素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、毎日、聖書を調べていました。これはとても大事なことです。私たちも素直に、熱心に御言葉を受け入れ、毎日、聖書を調べる姿勢が大切なのです。ところがテサロニケのユダヤ人たちが、このベレアの町にもわざわざやって来て、群衆を扇動し騒がせます。そしてパウロは、シラスとテモテを残して、一人アテネへと旅立つのです。

さて今日の聖書の箇所注目してみたいことは、パウロの伝道活動を受けて、同じようにイエス・キリストの受難と十字架、復活の話を聞きながら、そこには従った人々とそうでない人々がいたということです。ある人々はパウロの話を聞き、それを受け入れ信じます。しかしそれ以外の人々は、パウロの話を信じないどころか、パウロの伝道活動の邪魔をするようになります。それも執拗に、テサロニケの町からパウロたちを追い出しただけにとどまらず、ベレアの町まで追いかけて行ってパウロたちの妨害をするのです。ここに二種類の人たちが出てきます。パウロの話を素直に聞きそれを受け入れ、聖書を熱心に調べて信仰に入った人たち。そして、同じ話を聞きながらまったくそれを受け入れずに、執拗に妨害をする人たち。この2つの人々の違いはいったいどこにあったのでしょうか。それは、一言で言うならば信仰の決断の違いにありました。信仰の決断。それは、福音を聞いた人たち、聞いた側の決断です。パウロは、同じ聖書を用いて、同じ言葉で、同じようにイエスがキリスト、救い主であることを宣べ伝えました。そうやって、同じ御言葉を聞きながら、ある人々は信仰の決断によって受け入れ、他の人々は受け入れませんでした。信仰は、聞いた側・こちら側の決断がとても大きいのです。神様は、私たち人間の決断を大切にしてください。多くの人たちは、もっと聖書のことを勉強してからでなければとか、神様のことがまだまだわからないからとか言って、決断できないままです。私もかつて、クリスチャンになる前はそうでした。クリスチャンになりたいと願う妻に対し、「どうぞ、ご自由に、ただし私を誘わないで」と言っていました。そのころの私は、神様はどこかにおられるとは感じていましたが、その神様は自分とは関係ないと思っていました。自分が信じていなかったから、神様なんて必要ないと思っていた。でも考えてみますと、信じていない者に神様の御業がわかるはずがありません。信じていないのだから、神様の恵みはただの偶然であつたり、自分の力で勝ち取ったものであつたり、そうやって他の何かに摩り替えてしまっていた。今日の聖書の箇所には、信じた人々は、素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた、と記されています。信仰の決断をし、信仰を受け入れた人だけが、本当の神様の御業を理解することができ、神様から力をいただくことができるのです。

聖書の真理は、パウロが語るように、イエス・キリストが苦しみを受け、十字架に架かり、よみがえられたということです。いったい何のために、イエス・キリストは苦しみを受け、十字架にかかれ、よみがえられたのでしょうか。それは、私たち一人一人を罪の

縄目から解き放ち、解放してくださり、自由に生きる生き方を与えてくださるためでした。すべての人間が自由に生きること。すべての人の自由とは、他の人の自由を奪うことなく、お互いの自由を尊重し合いながら生きること。それが、キリスト者に与えられた自由と解放です。その自由と解放の元で、私たちは生きることが許されている。今、世界のいたるところで異常気象のためにこれまで経験したことのないような地震や噴火、大雨や渇水による被害が出ています。このように自然の猛威が容赦なく襲い掛かっているにもかかわらず、世界の国々では相変わらず、人と人とが命を傷つけ合い、奪い合う愚かな戦争を行っています。イラン人もアメリカ人も、イスラエル人もアラブ人も、ウクライナ人もロシア人も、ミャンマーやアフガニスタンや香港に住む人たちもすべての人々が、天地を造ってくださった神様から与えられた命を、自分の命だけではなく、他の人の命もすべて、神様に感謝して共に生きていく。この世のすべての人々が天地の創り主である神様の元で、みんなが等しく、自由と解放を受けながら生きていく。それがイエス・キリストがもたらしてくださった救いであり、そしてそのために、イエス・キリストは苦難を受けられ、十字架に架かれ、そこからよみがえられたのです。今日の聖書の箇所において、パウロはそのことを証ししています。そしてこのパウロの言葉を聞き、信仰の決断によってこの真理を信じた人たちは、聖書に記されているように、自由にいきいきとした生活を送ることができました。しかしそれを受け入れなかった人たちは、テサロニケのユダヤ人たちのように、パウロとシラスを執拗に追いかけて、彼らの邪魔をしようとしてしました。他の人の生き方を邪魔するという、なんとも憐れで不自由な人生を送っていたのです。

このように、自由に解放された生き方を選び取っていくのか、そうでない生き方を選び取っていくのかは、私たち一人一人の信仰の決断にかかっているのです。

今日は召天者記念礼拝、この神戸西教会に関わり、先に召された方々を覚えています。そのお一人お一人の教会との関わりはさまざまな形であったと思いますが、その背後にある信仰は、パウロが語っているように、聖書に裏打ちされた信仰です。聖書に記されている天地創造の神を信じ、その神様が送ってくださったイエス・キリストを信じる生き方。そして、イエス様が私たちの罪の代わりとして十字架上で贖いとなってくださった。そのイエス様の十字架によって、私たちの罪は赦され、こうして共に神様の御前で礼拝できるのです。この信実にした諸先輩方を覚え、私たちもこれからずっと、この信仰の灯をこの地で絶やすことなく、歩み続けていきたいと願います。

お祈りしましょう。